

## ○ねぎ病害

### 苗立枯病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 幼苗時期に発病する。
- ② 地際部分がくびれ倒伏・枯死する。地際部分に淡褐色の菌糸が生じることがある。
- ③ 高温多湿条件下で発生しやすい。

(防除)

- ① 苗床の土は消毒した土を使用する。
- ② 育苗トレイは地面に直接触れないように置く。

### 萎凋病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 地際付近から株が倒れる。導管は褐変する。
- ② 根は内部が腐敗し、外皮と芯のみ残してストロー状となる。
- ③ 生育適温は25℃前後であり、乾燥条件下で発病が多い。

(防除)

- ① 生育期間中に使用できる農薬はないため、土壌消毒や定植時処理剤による防除を徹底する。
- ② 地中に残った残渣が発生源となるため、圃場に残った残渣は腐熟させる。  
残渣の腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ③ 土壌中の菌密度を減少させるため、麦などの輪作やpHの低い圃場ではpHの矯正なども効果的である。

### 小菌核腐敗病 ボトリチス葉枯症(糸状菌)(別名:白斑葉枯病)

(生態と症状)

- ① 苗床及び本圃の両方で発生する。
- ② 小菌核腐敗病は葉鞘部に黒色で不正形のやや扁平な菌核が多数生じ、次第に拡大して腐敗する。
- ③ ボトリチス葉枯症は、葉に白色、楕円形の白斑を生じる。斑点の周縁は、発生初期には不鮮明である。
- ④ 病原菌の生育適温は、約20℃であり、秋期～冬期にかけて降雨が多いもしくは湿度が高いと発生が多くなる。

(防除)

- ① 排水の悪い圃場では、暗渠・明渠(額縁)排水等の排水対策を行う。
- ② 前作や定植苗からの病原菌の持ち込みを防ぐため、土壌消毒、定植苗の根部浸漬処理もしくは灌注処理を行うとともに、粒剤処理等による予防を徹底する。
- ③ 育苗中に発生した場合は、発病株を廃棄し本圃に病原菌を持ち込まないようにする。
- ④ 地中に残った残渣が発生源となるため、あらかじめ残渣を十分に腐熟させることで土壌消毒の効果が向上する。  
残渣の腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。

## 黒腐菌核病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 生育不良を生じ枯死する。葉は黄化し根や莖盤部は腐敗する。腐敗部分は時間が経つと黒いかさぶた状の菌核が形成される。
- ② 形成された菌核や被害株の残渣が次年度の感染源となる。
- ③ 圃場の入り口や外側から発生が確認されることが多い。
- ④ 発育適温は10～20℃であり、9～10月や3～5月にかけて発生が多い。

(防除)

- ① 連作による病原菌の土中への残存を避けるため、田畑輪換や輪作を行う。
- ② 未発生圃場に菌核が侵入することを防ぐため、発生圃場での作業は最後に行う。  
また、使用したトラクター等の管理機は洗浄、消毒を行う。
- ③ 土壤消毒剤を用いる場合は、あらかじめ残渣を十分に腐熟させることで防除効果が向上する。  
残渣の腐熟は地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ④ 粒剤は効果が得られるまでに約1週間はかかるため、液剤よりも早いタイミングで散布する。

## 白絹病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 菌はネギの軟白部の外側から侵入する。
- ② 地下部は白色で絹糸状の菌糸で覆われ、地際部には菌核を形成する。  
形成された菌核は翌年の感染源となる。
- ③ 病原菌の生育適温は32～33℃であり、約30℃以上で発生する。
- ④ 晴天日と激しい降雨が繰り返されると発生しやすい。

(防除)

- ① 発生初期は有効薬剤の株元散布の実施により被害が収まる場合がある。
- ② 粒剤は効果が得られるまでに約1週間はかかるため、液剤よりも早いタイミングで散布する。
- ③ 粒剤は収穫時期や本病の多発時期に使用し、その他の時期は液剤での防除を基本とする。
- ④ フルトラニル剤は耐性菌発生事例があるため、効果が悪いと感じたら別の剤を使用する。
- ⑤ 未熟堆肥は発病を助長させることがあるため、完熟堆肥を使用する。
- ⑥ 土壤消毒剤を用いる場合は、あらかじめ残渣を十分に腐熟させることで防除効果が向上する。  
残渣の腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。

## 葉枯病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 露地栽培での発生が多く、特に草勢が衰えた場合発生が多い。
- ② 他の病気や生理障害等によって生じた葉枯から侵入することがある。
- ③ 葉に紡錘形の病斑を生じる。
- ④ 黒斑病の病斑と似るが本病は同心円状の病斑を生じない。
- ⑤ 生育適温は25℃前後だが、15～20℃のやや低温と降雨は本病の発生を助長させるため梅雨時期や秋の多雨条件で発生が多い。

(防除)

- ① 夏秋どり作型は収穫時期に本病の発病適期にあたるため、予防散布を徹底する。

## 黒斑病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 露地栽培での発生が多く、特に草勢が衰えた場合発生が多い。
- ② 葉に明瞭な輪紋を持った紡錘形の病斑を生じる。
- ③ べと病など似た病斑となる病害もあるが、病斑の輪紋の有無で区別できる。
- ④ 他の病害や生理障害等によって生じた葉枯部分から侵入することもある。
- ⑤ 生育適温は25℃前後であり、降雨が多い条件を好む。

(防除)

- ① 夏秋どり作型は収穫時期に本病の発病適期が来るため、予防散布を徹底する。

## 黄斑病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 生育適温は15℃前後であり、多雨条件下を好む。
- ② 葉に黄色小斑点を生じる。
- ③ 肥料切れなどで草勢が衰えると発生しやすい。

(防除)

- ① 夏秋どり作型は収穫時期に本病の発病適期が来るため、予防散布をしっかりと行う。

## べと病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 退色病斑を生じ、灰白色の薄いカビを生じる。時間が経つと黒色となる場合が多い。
- ② 潜在感染するため好適条件に遭遇するまでは症状が見られないが、好適条件に遭遇すると一気に発病が顕在化する。
- ③ 生育適温は15℃前後で多湿条件の気候を好む。特に、降雨後の晴天時などに発生が確認される。

(防除)

- ① 潜在感染をするため、好適条件の前には治療効果のある剤を散布する。
- ② 一度発病すると抑えることは難しいため、定期的な予防散布を行う。

## さび病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 橙黄色の紡錘形病斑を形成する。
- ② 生育適温は15～20℃で、多雨条件下を好む。
- ③ 24℃以上の高温条件下では発生が少なくなる。
- ④ 秋季に多発し冬季に温暖多雨であった場合、春季は多発することが多い。

(防除)

- ① 窒素過多もしくは肥料切れで草勢が衰えると発生しやすいため、適切な肥培管理を心がける。
- ② 発生が多い地域・圃場では耐病性品種を選択する。

## 疫病(糸状菌)

(生態と症状)

- ① 生育適温は26～30℃で、土壌は多湿な圃場を好む。
- ② 幼苗時期に発病し、ハウス栽培では側面の雨がかかりやすい場所で発生が多い。
- ③ 黄白色の不整形病斑を生じる。
- ④ 頸部が軟化し根が腐敗するため苗立枯病と混同しやすいが、地際部分より上に黄白色病斑を生じる点で区別できる。

(防除)

- ① 連作圃場で発生が多いため、連作は避ける。
- ② 排水の悪い圃場では、暗渠・額縁排水等の排水対策を行う。

## 軟腐病(細菌病)

(生態と症状)

- ① 葉身基部の地際が軟化腐敗し、地上部が地面に倒れ込む。
- ② 腐敗した箇所は軟腐臭といわれる悪臭がする。
- ③ 葉の分げつ部や根部切断面から侵入する。
- ④ 排水不良の圃場を好む。
- ⑤ 生育適温は28～34℃の高温であり、長雨の続くような湿潤気味な気候を好む。

(防除)

- ① 窒素過多になると感染しやすくなるため、適切な施肥を行う。
- ② 土寄せは軟腐病菌侵入リスクを高めるため、高温時や降雨直後の土寄せは避ける。
- ③ 排水の悪い圃場では、暗渠・明渠(額縁)排水等の排水対策を行う。
- ④ 発病後は防除が難しくなるため、予防散布を基本とする。
- ⑤ 液剤で防除を行う場合は、台風及び長雨の襲来前や分げつ部が覆土される前に行う。
- ⑥ 粒剤は多発時期にあたる7～8月に防除効果が得られるよう散布する。  
粒剤は効果が得られるまでに約1週間かかるため、散布タイミングは液剤よりも早く行う。
- ⑦ 非病原性エルビニア製剤を適切に使用する。

## ○ねぎ虫害

### ネギハモグリバエ

(生態)

- ① 成虫は2mmほどで胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色となる。
- ② 成虫は産卵管で葉の表面に小さな孔を縦に連続して開け、にじみ出る汁液を摂取する(吸汁痕)。
- ③ 幼虫は葉に潜孔し葉肉部を食害し、白色で蛇行した線状の食害痕を残す。
- ④ 成熟した幼虫は葉から脱出し、土中で蛹になる。
- ⑤ 発育適温は20～25℃であり、春や秋に発生が多い。
- ⑥ 従来系統(別名:A系統)とは異なるB系統(別名:新系統)といわれる個体群が確認されている。  
B系統は従来系統に比べ1枚の葉にいる幼虫数が多く、食害程度が激しい傾向にある。
- ⑦ 従来系統とB系統で防除薬剤の効果差は確認されていない。

(防除)

- ① 発生して時間が経過すると薬剤の効果が低下するため、初期防除を徹底する。
- ② 成育初期に加害されると生育不良や株の消失となるため、定植時に粒剤処理や灌注処理を行う。
- ③ 従来系統とB系統で防除薬剤の効果差は確認されていない。

### ネキリムシ類

(生態)

- ① カブラヤガやタマナヤガが主体である。
- ② 昼間は土壤中に潜み、夜間に地上に現れる。定植後間もない苗を地際部から切り倒す。  
ネギが生育し大きくなると被害は減少する。

(防除)

- ① 定植時期に粒剤処理を行う。

### ネダニ類

(生態)

- ① ロビンネダニとネダニモドキ属の発生が確認されている。
- ② 夏から秋にかけて発生が多い。
- ③ ネギの腐敗部分を好む。  
特に、萎凋病、軟腐病及び白絹病等の土壌病害は、ネギを腐敗させネダニ類の発生の原因となる。

(防除)

- ① 登録農薬が少ないため激発すると抑える手段が少ない。  
そのため、定植前の土壌消毒や育苗期あるいは定植時処理剤の施用を行う。
- ② 腐敗した残渣が圃場に残っていると次年度の発生源となるため、速やかに腐熟させる。
- ③ 萎凋病、軟腐病および白絹病等の土壌病害は、ネギを腐敗させネダニ類の発生の原因となるため、これらの病害の防除を徹底する。

## ヨトウムシ類(シロイチモジヨトウ・ハスモンヨトウ)

(生態)

- ① シロイチモジヨトウは、県北では1年中見られ、特に夏から秋にかけて多発する。県北以外では越冬できないものの、夏期を中心に発生する場合もある。ハスモンヨトウは、発育適温は25℃前後であり、特に7月から10月にかけて発生が多い。上記2種ともまとまった雨がでない乾燥した気候の際に多発する傾向にある。
- ② シロイチモジヨトウは、葉の内側から加害する。葉肉のみ加害し表皮は残るため、加害痕は白い膜状となる。ハスモンヨトウは若齢～中齢期は葉の表面を削るように加害する。シロイチモジヨトウとは異なり加害痕は白い膜状とはならない。老齢期になると葉全体を加害する。

(防除)

- ① 薬剤感受性の発達が著しいため、ローテーション防除をしっかりと行う。
- ② 中・老齢幼虫になるにしたがって薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫のうちに防除する。
- ③ 早期発見や発生状況の把握のため、フェロモントラップ調査結果を活用する。
- ④ 交信攪乱剤による密度抑制は有効であるが、まとまった面積への導入が必要である。
- ⑤ ジアミド剤に対し感受性低下事例があるため、効果が劣る場合は異なる作用機構分類の薬剤を使用する。

## ネギコガ

(生態)

- ① 発育適温は25℃前後で、春と秋に発生が多い。
- ② 幼虫は、葉身に潜って食害し、食害痕は小白点や蛇行した線状の白斑となる。
- ③ 成熟した幼虫は葉から脱出し、網目状の繭を形成し葉上で蛹になる。

(防除)

- ① 発生初期防除に努め、生息部位に薬剤が十分かかるように散布する。

## アザミウマ類

(生態)

- ① ネギアザミウマが主体である。
- ② 葉を加害し、白いかすれ状の食害痕が残る。  
生育初期に被害を受けると生育不良となり、枯死する場合もある。
- ③ 高温少雨の条件を好み、6月から8月に多発することが多い。
- ④ 冬でも休眠せず1年中被害が見られる。

(防除)

- ① 多発すると防除が困難になるため、発生初期防除に努める。
- ② 発育ステージによって有効薬剤が異なるので、薬剤の選択に注意する。
- ③ 収穫期に被害が多いと商品価値が下がるので、収穫前防除を徹底する。
- ④ 圃場内及び周辺の除草を徹底する。

## アブラムシ類

(生態)

- ① ネギアブラムシが主体である。本虫の体色は真黒色で光沢があり、角状管は淡黄褐色である。
- ② 吸汁害により草勢が弱まり、収量低下を引き起こす。多発すると枯死する場合もある。  
また堆積した排泄物から「すす病」が発生し、株全体が黒く汚れ、葉の呼吸や光合成作用に悪影響を及ぼす。
- ③ ネギ萎縮病(SYSV)のウイルス媒介虫である。
- ④ 4～5月から発生し、夏期には減少するが、10～11月には再び増加する。

(防除)

- ① 増殖が早いので、発生初期防除に努め、生息部位に薬剤が十分かかるように散布する。
- ② ウイルス病発生株は速やかに処分する。
- ③ 圃場内及び周辺の除草を徹底する。

# ねぎ（土壌消毒剤）

農薬名		毒性	適用病害虫										備考 (散布量方法等)			
IRAC・FRAC コード	商品名		一般名(成分名)	苗立枯病	苗立枯病R※1	萎凋病	根腐萎凋病	小菌核腐敗病	黒腐菌核病	白絹病	紅色根腐病	センチュウ類		ネギハモグリバエ	ケラ	ハリガネムシ類
①	②															
8F		トラペックサイド油剤	メチルイソチオシアネート油剤	劇		●			●	●						
8F	8A	ディ・トラペックス油剤	①メチルイソチオシアネート ②D-D油剤	劇		●	●	●	●	●						
8B		クロールピクリン	クロールピクリンくん蒸剤 (99.5%)	劇	●	●			●	●		●	●	●		
8B		ドロクロール クロピク80 ドジョウピクリン	クロールピクリンくん蒸剤 (80%)	劇					●							
8F		キルパー	カーバムナトリウム塩液剤	普			● ※3	● ※2 ※4	● ※2 ※4							
8F		ガスタード微粒剤 バスアミド微粒剤	ダゾメット粉粒剤	劇	●	●	●	●	●	●	●	●				センチュウ類：登録はネコブセンチュウ

- ※1 「苗立枯病R」はリゾクトニア属菌による苗立枯病
- ※2 土壌約15cmの深さに注入し被覆または覆土鎮圧
- ※3 被覆内で土壌表面に散布または灌水
- ※4 土壌表面に散布し、直ちに混和し被覆



# ねぎ（定植前/苗消毒剤）

FRACコード		農薬名		毒性	適用病害虫			備考 (散布量方法等)
①	②	商品名	一般名(成分名)		萎凋病	小菌核腐敗病	黒腐菌核病	
1		トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普	●	●		
1		ベンレート水和剤	ベノミル水和剤	普	●	●		
3		トリフミン水和剤	トリフルミゾール水和剤	普	●			
7		パレード20フロアブル	ピラジフルミド水和剤	普			●	

# ねぎ（播種～定植時/殺虫剤）

農薬名		商品名	一般名(成分名)	毒性	適用病害虫							備考 (散布量方法等)
①	②				アザミウマ類	ネギアザミウマ	ハモグリバエ類	ネギハモグリバエ	ネダニ類	シロイチモジヨトウ	ネキリムシ類	
4A		アルバリン粒剤 スタークル粒剤	ジノテフラン粒剤	普	●		●				●	
4A		モスピラン粒剤	アセタミプリド粒剤	普		●		●				
4A		ベストガード粒剤	ニテンピラム粒剤	普		●		●			●	
4A		アドマイヤーフロアブル	イミダクロプリド水和剤	劇	●			●			●	
4A	28	アベイル粒剤	①アセタミプリド ②シアントラニリプロール粒剤	普		●		●				
28		ベリマークSC	シアントラニリプロール水和剤	普	●		●		●	●		タマキバエ、タネバエ登録有
28		ヨーバルフロアブル	テトラニリプロール水和剤	普		●	●					
28	4A	キックオフ顆粒水和剤	①クロラントラニリプロール ②ジノテフラン水和剤	普	●		●		●		●	
28	4A	ジュリボフロアブル	①クロラントラニリプロール ②チアメトキサム水和剤	普		●		●	●		●	タマキバエ、タネバエ登録有
28	4A	ミネクトデュオ粒剤	①シアントラニリプロール ②チアメトキサム粒剤	普	●		●				●	植溝土壌混和・セル型育苗トレイ 散布はタネバエ登録有、セル型育苗ト レイ散布はシロイチモジヨトウ登録あり
4A		ダントツ粒剤	クロチアニジン粒剤	普		●		●				タネバエ登録有
3A		フォース粒剤	テフルトリン粒剤	普				●		●	●	

# ねぎ（生育期/殺菌剤）

FRACコード		農薬名		毒性	適用病害虫										備考 (散布量方法等)
①	②	商品名	一般名(成分名)		軟腐病	疫病	べと病	さび病	黄斑病	黒斑病	ボトリチス葉枯症	小菌核腐敗病	白絹病	黒腐菌核病	
P02		オリゼメート粒剤	プロベナゾール粒剤	普	●										
P07		アリエッティ水和剤	ホセチル水和剤	普		●	●								
M01		ヨネボン水和剤	ノニルフェノールスルホン酸銅水和剤	普	●		●	●		●					
M03		ジマンダイセン水和剤	マンゼブ水和剤	普			●	●		●					
M03		ペンコゼブ水和剤	マンゼブ水和剤	普			●	●		●					
M03		ペンコゼブフロアブル	マンゼブ水和剤	普			●	●		●					
M03	4	リドミルゴールドMZ	①マンゼブ ②メタラキシルM水和剤	普			●								
M05		ダコニール1000	TPN水和剤	普			●	●		●		●		●	
1		トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普							●				
2		ロブラール水和剤	イプロジオン水和剤	普					●	●	●				
2		スミレックス水和剤	プロシミドン水和剤	普							●		●		
3		モンガリット粒剤	シメコナゾール粒剤	普							●	●	●		黒穂病、小菌核病登録有
3		ラリー乳剤	マイクロブタニル乳剤	普				●							
3		オンリーワンフロアブル	テブコナゾール水和剤	普				●	●						無人航空機散布登録有
3	M03	テーク水和剤	①シメコナゾール ②マンゼブ水和剤	普			●	●		●				●	
3		サプロール乳剤	トリホリン乳剤	普				●							
7		モンカット粒剤	フルトラニル粒剤	普								●			
7		モンカットファイン粉剤20DL	フルトラニル粉剤	普								●			
7		モンカットフロアブル40	フルトラニル水和剤	普								●			
7		アフェットフロアブル	ペンチオピラド水和剤	普				●	●		●	●	●	●	小菌核病登録有
7		パレード20フロアブル	ピラジフルミド水和剤	普				●	●		●	●	●	●	
7		カナメフロアブル ミリオネアフロアブル	インピルフルキサム水和剤	劇				●	●			●	●	●	
11		アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン水和剤	普 普			●	●	●	●				●	リゾクトニア葉鞘腐敗病登録有 ● 無人航空機による散布
11		ストロビーフロアブル	クレソキシムメチル水和剤	普				●	●	●					
11		メジャーフロアブル	ピコキシストロビン水和剤	普			●	●		●	●	●	●		
11	M05	アミスターオプティフロアブル	①アゾキシストロビン ②TPN水和剤	普			●	●	●	●	●			●	

# ねぎ（生育期/殺菌剤）

FRACコード		農薬名	商品名	一般名(成分名)	毒性	適用病害虫										備考 (散布量方法等)	
①	②					軟腐病	疫病	べと病	さび病	黄斑病	黒斑病	ボトリチス葉枯症	小菌核腐敗病	白絹病	黒腐菌核病	葉枯病	
11	4		ユニフォーム粒剤	①アゾキシストロビン ②メタラキシルM粒剤	普			●	●					●			
11			ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ水和剤	普				●	●			●			●	
12			セイビアーフロアブル20	フルジオキサニル水和剤	普								●	●	●		
14			リゾレックス粉剤	トルクロホスメチル粉剤	普									●			リゾレックス葉鞘腐敗病登録有
14			リゾレックス水和剤	トルクロホスメチル水和剤	普									●			
19			ポリオキシンAL水和剤	ポリオキシン水和剤	普						●						
19			ジオゼット水和剤	ポリオキシン水和剤	普				●		●			●		●	
21			ランマンフロアブル	シアゾファミド水和剤	普			●									
21	M05		ドーシャスフロアブル	①シアゾファミド ②TPN水和剤	普			●			●						
21	27		ダイナモ顆粒水和剤	①アミスルプロム ②シモキサニル水和剤	普			●									
24	M01		カスミンボルドー	①カスガマイシン ②銅水和剤	普	●											
27	40		ベトファイター顆粒水和剤	①シモキサニル ②ベンチアバリカルブイソプロピル水和剤	普			●									
29			フロンサイド粉剤	フルアジナム粉剤	普								●	●			
31			スターナ水和剤	オキサリニック酸水和剤	普	●											
39			ハチハチ乳剤	トルフェンピラド乳剤	劇			●	●								
40	M03		カンパネラ水和剤 ベネセット水和剤	①ベンチアバリカルブイソプロピル ②マンゼブ水和剤	普			●			●						
40	M05		プロポーズ顆粒水和剤	①ベンチアバリカルブイソプロピル ②TPN水和剤	普			●								●	
45	40		ザンプロDMフロアブル	①アメトクトラジン ②ジメトモルフ水和剤	普			●									無人航空機散布登録有
49	40		オロンディスウルトラSC	①オキサチアピプロリン ②マンジプロパミド水和剤	普			●									無人航空機散布登録有
U18			バリダシン液剤5	バリダマイシン液剤	普	●								●			
7			ケンジャフロアブル	イソフェタミド水和剤	普										●		

# ねぎ（生育期/殺虫剤）

農薬名		毒性	適用病害虫								備考 (散布量方法等)	
IRACコード	商品名		一般名(成分名)	アザミウマ類	ネギアザミウマ	アブラムシ類	ネギハモグリバエ	タマネギバエ	シロイチモジヨトウ	ヨトウムシ		ネギコガ
①	②											
1B	スミチオン乳剤	MEP乳剤	●		●					●		
1B	エルサン乳剤	PAP乳剤	●		●							
1B	ダイアジノン乳剤40	ダイアジノン乳剤	●		●	●	●			●		
1B	トクチオン乳剤	プロチオホス乳剤	●					●				●
3A	アグロスリン乳剤	シペルメトリン乳剤	●		●	●		●		●		
3A	アディオオン乳剤	ペルメトリン乳剤	●					●		●		
3A	ガードベイトA	ペルメトリン粒剤									●	
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤						●				
4A	ダントツ粒剤	クロチアニジン粒剤		●		●						●
4A	ダントツ水溶剤	クロチアニジン水溶剤		●		●						
4A	ベストガード粒剤	ニテンピラム粒剤		●		●						
4A	モスピラン水溶剤	アセタミプリド水溶剤	●									
4A	モスピラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水溶剤	●									
4A	アルバリン粒剤 スタークル粒剤	ジノテフラン粒剤	●			●						ハモグリバエ類で登録 クロハネキノコバエ類登録有
4A	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	ジノテフラン水溶剤	●			●						ハモグリバエ類で登録 トビイロヒョウタンゾウムシ、クロハネキノコバエ類登録有
5	スピノエース顆粒水和剤	スピノサド水和剤	●					●				
5	ディアナSC	スピネトラム水和剤	●			●		●		●		
6	アニキ乳剤	レピメクチン乳剤		●		●		●		●		ハモグリバエ類で登録
6	アフーム乳剤	エマメクチン安息香酸塩乳剤	●			●		●				ハモグリバエ類で登録 アザミウマ類、ハモグリバエ類は無人航空機散布 登録有
9B	コルト顆粒水和剤	ピリフルキナゾン水和剤		●	●	●						無人航空機散布登録有
13	コテツフロアブル	クロルフェナピル水和剤				●		●		●		ヒョウタンゾウムシ類登録有
14	リーフガード顆粒水和剤	チオシクラム水和剤		●		●				●		

# ねぎ（生育期/殺虫剤）

農薬名		毒性	適用病害虫							備考 (散布量方法等)			
IRACコード	商品名		一般名(成分名)	アザミウマ類	ネギアザミウマ	アブラムシ類	ネギハモグリバエ	タマネギバエ	シロイチモジヨトウ		ヨトウムシ	ネギコガ	ネキリムシ類
①	②												
15		アタブロン乳剤	クロルフルアズロン乳剤	普	●			●					
15		ノーモルト乳剤	テフルベンズロン乳剤	普				●					
15		カスケード乳剤	フルフェノクスロン乳剤	普	●		●	●					シロイチモジヨトウ感受性低下事例有 クハ、ナハ、コハ、I類登録有
				普	●		●	●					無人航空機による散布
15		マッチ乳剤	ルフェヌロン乳剤	普	●			●					
16		アプロードフロアブル	ブプロフェジン水和剤	普								●	
18		マトリックフロアブル	クロマフェノジド水和剤	普				●					
18		ファルコンフロアブル	メトキシフェノジド水和剤	普				●					
21A		ハチハチ乳剤	トルフェンピラド乳剤	劇	●		●	●		●			シロイチモジヨトウ感受性低下事例有 クハ、ナハ、コハ、I類登録有
21A	22B	アクセルキングフロアブル	①トルフェンピラド水和剤 ②メタフルミゾン水和剤	普		●		●		●			
22A		トルネードエースDF	インドキサカルブ水和剤	普				●					無人航空機登録有
28		フェニックス顆粒水和剤	フルベンジアミド水和剤	普				●		●			シロイチモジヨトウ感受性低下事例有 無人航空機散布登録有
28		プレバソソフロアブル5	クロラントラニリプロール水和剤	普			●	●		●			シロイチモジヨトウ感受性低下事例有、ハモグリバエ類で登録、無人航空機散布登録有
28		ベネビアOD	シアントラニリプロール水和剤	普	●		●	●					ハモグリバエ類で登録 無人航空機散布登録有
28		ベリマークSC	シアントラニリプロール水和剤	普	●		●	●			●		ハモグリバエ類で登録
28		プリロッソ粒剤オメガ	シアントラニリプロール粒剤	普	●		●						ハモグリバエ類で登録
28		ヨーバルフロアブル	テトラニリプロール水和剤	普	●		●	●		●			ハモグリバエ類で登録 クハ、ナハ、コハ、I類登録有
				普	●		●	●		●			ハモグリバエ類で登録 無人航空機による散布
30		グレーシア乳剤	フルキサメタミド乳剤	普	●		●	●		●	●		ハモグリバエ類で登録 クハ、ナハ、コハ、I類登録有
30		ブロフレアSC	ブロフラニリド水和剤	普			●	●		●			
34		ファインセーブフロアブル	フロメトキン水和剤	劇	●		●						
UN		プレオフロアブル	ピリダリル水和剤	普		●		●					